SEMINAIRE OUVERT PERMANENT

octobre 2006

セミネール通信　2006 年 10 月

公開セミネール『心的構造論』　藤田博史（精神分析医）

第 44 回第 44 講「精神病の構造的治癒理論とその治療技法（32）」

2006 年 10 月 14 日（土）　13 :30-16 :30（開場時間も 13 :30 になります）

第 45 回第 45 講「精神病の構造的治癒理論とその治療技法（33）」

2006 年 11 月 11 日（土）　13 :30-16 :30（開場時間も 13 :30 になります）

第 46 回第 46 講「精神病の構造的治癒理論とその治療技法（34）」

2006 年 12 月 9 日（土）　13 :30-16 :30（開場時間も 13 :30 になります）

会場：日仏会館　509 号室　聴講料:1000 円

日仏会館　東京都渋谷区恵比寿 3-9-25　JR 恵比寿駅東口から「動く歩道」経由で徒歩 10 分

主催：ユーロクリニーク　協賛：ドール・フォーラム・ジャパン

問合せ先：ユーロクリニーク文化部　TEL: 042-308-7637　E-mail: ys@euroclinique.com

SÉMINAIRE OUVERT PERMANENT

FUJITA,Hiroshi (psychiatre-psychanalyste)

Le 44ème SÉMINAIRE　samedi 14 octobre 2006------13h30-16h30

Le 45ème SÉMINAIRE　samedi 11 novembre 2006------13h30-16h30

Le 46ème SÉMINAIRE　samedi 9 décembre 2006------13h30-16h30

SALLE#509 DE LA MAISON FRANCO-JAPONAISE

Frais de participation :1000yen　LA MAISON FRANCO-JAPONAISE

10 min.à pied depuis la Sortie Est de la Gare d'Ebisu(ligne JR Yamanote)

Organisation:L'EUROCLINIQUE　Collaboration:DOLL FORUM JAPAN

Renseignements: DIVISION CULTURELLE DE L'EUROCLINIQUE

TEL: 042-308-7637　E-mail: ys@euroclinique.com

発行

EUROCLINIQUE

編集

ユーロクリニーク文化部

目次

公開セミネール案内	1	心の問題を構造から考える　水上雅敏	5
『セミネール断章』藤田博史講義	2	ヨーロッパ美術紀行　清水由美子	6
		ユーロクリニーク案内	7
ブレーキを踏もう　佐藤良平	4	マンスリー対談案内、information	8

SÉMINAIRE OUVERT PERMANENT

公開セミネール『心的構造論』より

「セミネール断章」

講義　藤田博史　　編集　榊山裕子

Le 43ème SÉMIINAIRE

第 43 回第 43 講「精神病の構造的治癒理論とその治療技法（31）」より

samedi 9 septembre 2006　　2006 年 9 月 9 日(土)　日仏会館(東京・恵比寿)

（『セミネール断章』は、公開セミネールのご紹介として、講義より抜粋して掲載しています）

脳と精神病

人の心は幸いにも言葉によって構造化されているので、精神分析をはじめとした構造的な考え方が適用されるわけですが、精神分裂病はある意味、人間の思考の脱構築というか、思考のシステムそのものが別のものになってしまうような病態なので構造的なアプローチが出来るわけですが、たとえば一般的な精神医学の教科書を読んでみると精神分裂病というのは「情意障害」だと書いてある。どういうことかというと、人間の精神的な機能を「知・情・意」と分けて考えたとき、精神分裂病では「情意障害」、つまり知性は非常に良く保たれている。それに比べて「情動」とか「意志」の働きがガクンとおちる。例えば「無為」「自閉」といわれる症状もその延長上にある。情動と意志の障害こそが精神分裂病のもっとも基本的な病態であると考えられているわけです。

「そんなことはないじゃないか、知性も障害を受けているではないか、妄想が生じたり、幻聴が聞こえたり、言葉によって構築されたものが変化を被っているじゃないか」といわれるかもしれません。しかしながらこれらの症状は障害そのものではなく、むしろ病者自身による治癒努力の結果と考えられるべきものなのです。精神分裂病の基本病態は情動と意志が侵されるものであって、知性はむしろ心的な欠損を補うために活発に活動して積極的に意味を生成しその結果「妄想」とか「幻覚」が生じてしまう。

こういう考え方が重要です。妄想や幻覚も情意障害と同列に精神分裂病の一つの症状なのだと単純に考えてしまっては、分裂病の謎にうまく接近することができない。では情動や意志というものが大脳生理学的にはどのような位置づけがなされているのかというと、それぞれ側頭葉、前頭葉がその座であるという風に考えられています。とすれば精神分裂病の大脳生理学的な病因の座は側頭葉や前頭葉ではないかという推測も生まれてくるわけです。

前頭葉が活発に活動して心的な欠損を補おうとして幻覚妄想状態が出現し、さらには心的な活動が実際に身体的な活動となって、観察者から「異常行動」と見なされるようになったとき、精神病院に入院となり、社会から隔離され、精神病院内でも活発な活動が収まらないとき、昔はロボトミーlobotomyと呼ばれる前頭葉の神経繊維の連絡を頭蓋骨に穴を穿って外科的に切断する方法が選択された時期もありました。また前頭葉に電流の流して人工的にけいれんを起こさせる「電気痙攣療法」なる技法は現在でも用いられています。

『カッコーの巣の上で』という映画を見た方もおられるかと思いますが、ジャック・ニコルスンが前頭葉のロボトミーの手術を施されてしまい妙におとなしくなってしまうというそういう場面がありました。わたしがまだ精神科医になりたての頃、勤務先の精神病院にも入院して30年、40年という方が何人もいて、その中には前頭葉に傷を持った患者さん、つまりロボトミー手術を受けた患者さんも数人おられました。

精神分裂病という病気そのものが、身体つまり脳を基盤にして起こってきているのはほぼ明らかなことです。残念ながらその原因は未だに謎ですが。

ただし原因とはいっても、脳細胞を顕微鏡で調べてわかるような形態学的、組織病理学的なものではなさそうです。

むしろ脳という一つの組織体が作り出しているサーキット、つまり回路にソフトウェア的「バグ」としての異常があるのではないか。コンピュータに例えるならばソフトウェアにおけるプログラミングの中に異常があるのではないか。現在の精神医学的研究が脳というハードウェアの異常をはっきり発見してくれない限りはこの疑念が消え去ることはないのです。

コンピュータと脳

脳とその機能をコンピュータに照らして考えてみることもあながち無駄なことではないでしょう。コンピュータはハードウェア上にソフトウェアをインストールするわけですが、これは生まれ落ちた子供が成長してゆくに従って言葉をはじめとして様々な機能を獲得してゆく過程に似ています。つまり他者が外部から働きかけることによって言葉や一連の行動が獲得されてゆく。つまり一連の情報がインストールされてゆくわけです。

まず１つはインストール時の異常、ソフトウェアをインストールしている時の異常、インストールしている最中に「ボタンを触らないでください」と書いてあったのにボタンを触ってしまったとか、インストールしている最中に停電になってしまったとか、何かソフトウェアのインストール時の異常が一つ想定されるということと、あとはやはりハードウェアの水準であらかじめ異常があったのではないか、というようなこの２つの観点から考えていく必要があると思うのです。

あともう１つはソフトウェアとハードウェアのミスマッチ、つまりソフトウェアそのものにも大きな異常はない、ハードウェアそのものにも大きな異常はない、でもそのハードウェア上にある特定のソフトウェアをインストールすることによってミスマッチが

起こってしまう。たとえばマックの機械の中に無理矢理ウィンドウズをインストールしようとしてもインストールできないですね。でも何かの間違いでインストールされてしまった、というようなことがひょっとしたら考えられるかもしれない。

両方の側面をわれわれえは忘れてはいけないですね。つまりハードウェアの側面とソフトウェアの側面。

この二分法だけではないですよ、あとはソフトウェアとハードウェアのインターアクション、古くて新しい問題です。昔から「心身問題」と言われている分野です。心と身体の問題、心身問題。

だから考えてみれば問題の所在は割と単純です。つまりソフトウェアがおかしいのか、ハードウェアがおかしいのか、あるいはソフトウェアとハードウェアの相性が悪いのか、この３つの可能性です。

ではソフトウェアが悪いと言った時に、ソフトウェアのプログラムそのもののなかに既にバグが含まれている場合と、たとえばDVDとかCD-ROMに傷がついていてインストールすべきソフトウェアが何らかの形で一部壊れてしまっているという場合もあるでしょう。たとえば最近はダウンロードしてそのままインストールするソフトウェアがありますが、ダウンロードしている最中に途中で障害が生じて完璧な形でソフトウェアがダウンロード出来なかった場合などが考えられると思います。

一方、ハードウェア上の異常ですが、ハードウェア上の異常を考えてみると、脳というのはサーキット、神経細胞による回路ですから、そうすると神経細胞そのものの異常という部分と、神経と神経との接合部の異常というのと２つ考えられます。

また人間のハードウェアというのは非常に難しい部分を含んでいて、最初から出来上がっているわけではなくて、ネットワークがどんどん出来ていくタイプの自己増殖型の回路、自己増殖型のハードウェアなのです。コンピュータとしてはスゴいですね、コンピュータ自身の中身がどんどん進化していくようなコンピュータと同じですね。自己増殖型のハードウェアなので、新しくどんどん神経接合を作っていく。つまり新しい回路を自己増殖するある意味オートポイエティックなものですけれども、その回路を作っていく最中で何らかの異常が生じるということもまた一つ考えられます。こういう一つ一つの可能性をしらみつぶしに挙げていって一個一個検証していけば、単純なことを言えばどこかに異常が見つかるでしょうし、その異常は一カ所かもしれないし、何カ所にも及ぶかもしれないし、これは今後の課題でしょう。そういう研究をしていかなければならないのだと思います。

可能世界と脳

脳というのは極めてマルチフォーカルな組織体です。マルチフォーカルというのはフォーカスがたくさんあるという意味です。脳のここでものを考えているというような一定のセンターが存在しないということです。つまり脳全体として一つの回路を成している。だからコンピュータでいうところのCPUが見当たらない。

脳全体で１つのトータリティを作り出しているので、たとえば多重人格のように１つの脳に１つの人格というわけではないということです。１つの脳に複数の人格、１つの脳に複数の病気、１つの脳に複数のソフトェアのインストールが可能なのだということです。最近のマックはついにマックもウィンドウズも両方インストールできるようになりましたが、そんな感じです。

つまり脳というのは結構フレキシビリティに富んでいて、非常に多様的なものなのだということなのです。わたしは多世界論理や可能世界という考え方を生み出した当の脳こそが、実は自らの機能を自己表現してしまった、多世界や可能世界を生み出す場であると考えています。論理学が提供している可能世界とか、SF 小説が提唱している平行宇宙とか平行世界も、実は脳そのものの機能がそれらの雛形になっていると考えるのです。誤解を恐れずにいえば、脳そのものが既に平行宇宙生成装置であるかもしれません。

今までの例でいくと、脳イコール１台のコンピュータというイメージを皆さんに与えてしまったかもしれませんがそうではないのです。脳は複数のコンピュータに匹敵する何らかの回路なのです。

神が自分の姿に似せて人間を作ったように、恐らく人間は自分の姿に似せてコンピュータを作ったのだと思うのです。そうして見えてくることというのは、脳は多世界の座であって、コンピュータが何台も入っているのと同じこと、つまり狂っている場合でも狂っていないコンピュータがそのなかにあるということです。つまり脳全体が狂っているわけではないということです。だからこそ治癒可能性が生じてくる。

皆さん、脳の代償機能ってご存知ですよね。脳出血とか脳溢血で倒れた人がリハビリするとまた機能が回復するでしょう。それは神経細胞が壊れて死んでしまっていても、別の神経を使ってそれに代わる、それと同等の仕事をさせることが可能なのです。脳は非常にフレキシビリティに富んでいるわけです。

それと同じで「あの人は精神分裂病だ」と言うと、脳全体が精神分裂病だというようなそういう感覚にとらわれてしまいますが、そうではなくてそれは１つの脳の機能の現われに過ぎない。つまり脳は多世界の場、それは比喩ではなくてそのままダイレクトに可能世界意味論の座であって、そのなかには正常も分裂病も躁鬱病も同居している。病気というのはその脳の、言ってみれば一部の病気。一部というのは解剖学的な一部という意味ではなくて、脳の機能を考えたときに、脳の機能全体の病気ではなくて脳の機能の一部の病気なのだと考えるわけです。だから正常に働いている部分があるのだということです。

スペースシャトルでは一つの機械が壊れても補助のコンピュータがあってすぐにその補助のコンピュータが作動して航行を続けることができるというのと同じで、そういう補助コンピュータみたいな形で、まあ補助というわけではなく並列されたコンピュータがあって一つが異常であっても正常な脳が残り続ける。そういう考え方を捨てることがなければ、治療ということに対する見通しもあるいは希望も捨てることはないですよね。つまり１つのコンピュータが駄目になっても正常な部分を引き出すようなその手法を考えればよいのです。だからこそ多世界論理、多世界というものの考え方が、これはジョークとか比喩とかではなくて本当に精神病の治療技法に適用できるということです。

脳と量子コンピュータ

自分たちの脳をコンピュータにたとえてきましたが、脳は厳密にいうと二進法ではありません。脳が二進法ならデータ処理に大変な時間がかかってしまう。横断歩道を渡ろうと思って車が来たらほとんどの人がひかれてしまう（笑）。電車が来てドアが開いた時に乗ろうと思っている間にドアが閉まってしまう（笑）。

ここでやはり考えなければいけないのは、従来のコンピュータとの比較には限界があるということです。人間の脳というのはもともと違うのです。脳はおそらく二進法ではないでしょう。同時に瞬間的に複数のことを考えることができる。コンピュータは同時に処理できない。では同時に処理できるコンピュータは何かというと、量子コンピュータなのです。

量子力学の観測によれば、たとえば水素原子の回りには普通電子が一個しか回っていないのだけれども、観測すると同時刻に2つの異なる場所にその電子が観測される。つまり量子というのは二進法ではないのです。0も1も同時にとることができる。つまり「どちらか」の世界ではなくて「どちらも」の世界なのです。ここに生まれてくるのが量子ビットという考え方です。

（つづく）

ブレーキを踏もう

佐藤良平

連載 23　ソクーロフ監督作品『太陽』を観る（1）

ロシアの映画監督アレクサンドル・ソクーロフが 2004 年に撮り上げた『太陽』は、その内容ゆえに日本国内での公開が難しいのではないかと言われていたが、ようやくこの８月から都内で上映されている。この注目すべき映画について詳しく書くことにする。

筆者は今年の２月に初めて『太陽』を観る機会を得たのだが、あまりの面白さにすっかり惚れ込んでしまい、イギリスで４月に発売された DVD を手元に置いて繰り返し観ている。

最初に『太陽』の内容を簡単に紹介すると、主人公は昭和天皇で、太平洋戦争の終結から人間宣言に至る時期を描いた作品だ。天皇の役をイッセイ尾形、皇后を桃井かおり、侍従長を佐野史郎が演じている。上映時間は 106 分。ビスタサイズ、カラー作品。セリフは一部を除いてすべて日本語で語られており、私が持っている英国盤 DVD には吹替えが収録されておらず、英語字幕付だ。このことからも判るが、大規模な観客動員を狙った娯楽作ではなく、監督の意図はどうあれ海外では一種のアートフィルムとして扱われている。

これは実在の人物を主人公で歴史上の事件を描いているのだから、観客の関心が作品がどの程度まで事実に迫っているか、いわば「リアルであるかどうか」という点に集中するのは避けられないだろう。しかしながら、この映画はそういった種類の欲求を満たすために制作されたドキュメンタリー指向の映画ではない。あくまでも、当時の天皇個人が置かれた境遇および彼の心的状況を、映画というメディアに即した形で表現するのが狙いだと考えるべきだ。したがって、作中で描かれている内容と歴史上の事実を比較してああだこうだという議論には、ほとんど意味がない。

『太陽』から離れた一般論になるが、そうした種類の「リアル度」議論は実際に起った出来事を題材とする映画に必ず付いて回る。しかし、その多くは空しい。なぜなら、一般的に映画の制作者たちは「自分たちが作っている作品の完成度を映画というフォーマットの範囲内で高めることこそが自分たちの使命である」と考えており、そこでは映画の内容が歴史上の事実に添っているかどうかなど二の次、三の次以下でしかないからである。ドキュメンタリー映画や実録映画を名乗る作品すべてを含めて、映画とはそういうものだ。

よって、良識ある読者の皆さんは、それがいかなる映画であれ、映画に基づいて歴史や事実を語ってはならない。映画は、映画以外の事物と結び付けず、ただ映画として語るべきだ。それが歴史や事実というものに対する最低限の礼儀であると心得てもらいたい。

もちろん筆者だって石や金属などの無機物でできているわけではないから、会話を楽しむために映画と事実を故意に混同することはある。倫理に合致するかどうかはともかく、そうした会話や議論が映画にまつわる楽しみの一つであることは否定しない。たとえば、映画『パール・ハーバー』でハワイを攻撃した零式戦闘機が緑色に塗装されていたことがどれほどナンセンスであるか筆者に語らせれば、周囲の迷惑を顧みず、最低でも 20 分のあいだ他者に一切介入させることなく喋り続けるはずだ。筆者に言わせれば、それは『パール・ハーバー』を楽しむ上で絶対に避けて通れない話題なのである。

『パール・ハーバー』程度の映画であれば、その種の馬鹿話を以て迎え撃つことも許されよう。ただし、そういった見方で語るに相応しい映画とそうでない映画を峻別し、より制作者の狙いに適した方法で映画を遇するのは、観客に与えられた使命と言ってよい。アカデミックな映画批評へのアンチテーゼとして「トンデモ映画」や「バカ映画」という切り口が流行したおかげで、それらのアプローチをありとあらゆる映画に対してひとしなみに適用して憚らない安易な評者や観客が大増殖したのは嘆かわしい。彼らは個々の映画が目指しているレヴェルを慮ることなく、すべての映画を自らの低俗なレヴェルまで引きずり下ろすことによって、多くの映画を台無しにしている。一昔前に通用していた「おちょくって良いことと悪いことがある」という最低限の節度は、もはや機能していない。

トンデモ映画やバカ映画が大好きな連中が『太陽』を「ツッコミどころ満載」の「おいしいネタ」として散々に食い散らかすであろうことは想像に難くない。今の日本における映画の受容態度一般を考えれば、そうしたやり方が主流であるからだ。筆者は『太陽』が大好きなので、本作がそうした扱いを受けるとすれば大いに不満がある。そこで、今ではすっかり廃れてしまったオーソドックスな解法を用いて『太陽』の見方を書くことにしたのだ。ここまで来て、長いながい前置きがやっと終ったことになる。お疲れさまでした。

これが奇妙な映画であることは確かだ。日本人役の俳優はすべて日本人が演じ、日本語で話されるべき台詞はすべて日本語で語られる。しかし、殆どの撮影がロシアで行われ、主なスタッフは監督以下ロシア人が多い。出資はロシア・フランス・イタリアの合乗りである。日本の歴史の中でも非常に重要な局面を描いた作品が、ほぼ日本と無関係なところで作られたことになる。だが、地理的・民族的にイタリアやエジプトとは何の関わりもないハリウッドで『ベン・ハー』や『クレオパトラ』が制作されたことを思えば、映画史の中で『太陽』が特に異常なケースだとは言いがたい。

監督は知日派として有名で、『太陽』以前にも日本に関する作品を何度か撮っている。しかし、彼の日本に対する感覚と、他ならぬ当事者である我々日本人の感覚との間に大きなギャップが存するのは当然のことだ。

判りやすい例を挙げると、天皇の住居の周囲で鶴（鳥の鶴である）が放し飼いにされている描写が出てくる。筆者は実際に皇居の内部を見たことはないが、常識で考えれば「皇居では鶴なんか飼っていません」と断言しても十中八九間違いではなかろう。バカ映画を愛してやまない諸君は、すかさず鬼の首でも獲ったように「んーなワケねえだろ。これだから露助のやる事はよォ」と大喜びするに違いないのだが、それは早計である。

なぜかと言えば、おそらくソクーロフは中国の王室に起源を持つ伝統に連なるものとして日本の皇室を捉えたからだ。中国の皇帝はこの世の中の全てをコントロールできる絶大な権限を持っているから、彼の居場所（たとえば紫禁城）には象徴的に表現された自然界の縮図が設けられる。それを表現する一端として、皇居の場面に鶴が出現したのだ。こうした考え方は「世俗の権力を欲しいままにする王も、自然の摂理を支配する神を支える聖職者を超えられない」とする西欧的な思考とまったく相容れない性質を帯びている。

ソクーロフはオリエントの文化を大真面目に尊重しており、それが西欧文明を代表するアメリカの軍隊に敗れるという「文明間の衝突」を『太陽』で描いた。衝突の矢面に立たされた昭和天皇を主人公としたのは、監督にとって必然としか言いようがあるまい。

（さとう・りょうへい　文筆業）

文責：佐藤良平

心の問題を構造から考える

水上雅敏

連載　３　　シーニュ的思考にとって生命とは何か？―酒鬼薔薇少年事例から―

「それでも猫を殺すことはやめられませんでした。殺しているうちに段々、『人を殺してみたい』と思うようになりました。人間の内臓や脳味噌の中身がどうなっているのかとずっと興味を持っていました」「人の命も蟻やゴキブリと同じじゃないですか？」。酒鬼薔薇少年の言葉である（彼の鑑定書の父母による拾い書き＜文献１＞からの抜粋）。少年にとって生命とは何だったのだろう。少年は結局「高機能広汎性発達障害」と診断されたらしいが（於：医療少年院での再診断）＜文献２＞、この障害とこう考えてしまう心性とを構造的に関連付け得るであろうか。この障害を持つ殆どの人は殺人など事件を起こさないのに、何が問題であったのだろう。

まず「高機能広汎性発達障害」であるが、この下位分類には今よく聞くアスベルガー症候群、高機能自閉症、高機能非定形自閉症がある。少年がどれなのかは筆者は知らないが、兎も角、これらが共有する困難性は相互的対人関係やコミュニケーション能力の障害及び常同的行動・興味・活動とされる。これだとまだ分かり難いが、筆者自身は「一義性」がこれらの特徴を最も伝える言葉と感じている。言い換えれば、言葉や物事の表現的側面＝シニフィアン（意味するもの）とその意味＝シニフィエの癒着した、謂わばシーニュ（＝サイン、道路標識のような一義的な表示）的な思考である。これを今回この障害の中核的な構造として論じていきたい。これは例えば、或るケースは、１年１組の人はこのトイレを使うこと、と指示されると、「このトイレ＝１年１組のトイレ」と意味づけ、他の組の人がそれを使うことを阻んだが、このようなことである。酒鬼薔薇少年では、例えば「人間は野菜と同じ」との彼の言葉を、母が以前少年が緊張しないように「人間を野菜と思ったらいい」と言った言葉から固執されたこういう一義性の表現として疑えそうだが、即断はよそう。又、「心の理論」―簡単に言えば、他者に心があることを理解し、他者の心を推測する能力―の障害に、この障害の中核を見る考えかたもある。例えば、少年が殺人を「人間の壊れやすさを確かめるための『聖なる実験』」と述べるように人間をいわゆる「もの扱い」しているところ等もこれかも知れない。だがこの「心の理論」の障害もシーニュ的思考の結果とも考えうる。「心の理論」を、逆説的に、「他者の心の存在も他者の考えも把握不可能なものとして、それについて色々推測を弁証的に進めるところに成立しているもの」、と捉えると、これは物事を一義的に決め付けるシーニュ的思考には手の届かないことだからである。

ではこういうシーニュ的思考にある人にとって、「生命」とはどのようなものだろう。私達は、生命を成長や心臓の動き等の原因として神話的に幻想することはあっても、生命そのものは実体の無いものとして把握していよう。この実体の無さが分かるのは、そもそも「無」を許容できていてこそだろうが、これがシーニュ的思考にある人には困難であると考えられる。通常の思考様式では、シニフィアンの連鎖とそれらの遡及的な相対化がシニフィエを生み出し、過去のそれを刷新しつつ進む。ここではこのシニフィアン相互の相対化がその隙間としての無をくるみ、さらにその相対化が他のシニフィアンと相対化されていくことになる。私達は無と出会っても、こうして思考をある意味そこから斜めにずらしえる分、無を許容できる。　しかし、シーニュ的思考、つまりシニフィアンとシニフィエの癒着したブロックを切れ切れに並べたてていくだけの思考にとっては、無はこれらブロック間の直接的で脅威的な隙間でしかありえないからである。こう考えるとシーニュ的思考の者は、無を埋めることを常に期待している、と考えてもいいかもしれない。このような人には、生命は、―表立ってこれと示せて無を埋めえるものでないにしろ―、無の奥に宿る何か隠れた実在として想像されやすいのではなかろうか。分析的には、母の去勢の穴の奥にあって、独り享楽しているに違いないと想像される父なるファルス（想像的ファルス）というところであろう。

ところで、これはこれで、嫉妬、つまり同一化とそれを破壊しその位置を乗っ取ろうとする衝動を触発し、本人を揺らす想像である。しかし高機能広汎性発達障害の人々は日常の大半は安定している。これは何故だろう。まず、日常的にはシーニュのブロックの増殖や、何らかの対象への執着、あるいは学習した多義性（＝複数のシニフィエとの対応）の拡がりによってどうにか無を覆えるだろうし、生命を深刻に問題にする機会も無いから、とも考え得よう。又、シーニュと言っても、模倣で学んだのなら別だが、そもそものそのシニフィエを生める程度のシニフィアンの連鎖の遡及的相対化は在った可能性がある。また彼らには、人により程度は様々だが普通に語れているように見える面も多く、通常に近い思考様式が並存している可能性もある。仮にそうだとすれば、これらがその可能な能力の限りで無を許容し生命の想像的実在化に歯止めをかけていることも考えられ、それがこの安定に寄与している可能性も考えねばならないだろう。

しかし、酒鬼薔薇少年の場合は祖母が亡くなった。動物解剖は「それを境にして始まった」との彼の供述から見ると、祖母の死がこの無を開けたとも考えうる。祖母の死を認めることが出来ず、無の奥に生命が実在するものとし、これを探しだそうとする、これが彼の解剖や殺人だったのではないか。また、翻って、この行為自体が、生命の実在の想像を支えてくれるものでもあった可能性もあろう。他方「人間の命＝ゴキブリ・蟻の命」との彼の考えには生命の価値下げを、又、殺害の反復には死の日常化も窺える。換言すれば、彼の解剖や殺人は、自分を翻弄させた生命の位置を乗っ取って、生命の「在－不在」を支配する位置に来ることで能動性を奪回しようとする試みだったのではないか。

酒鬼薔薇少年は祖母の墓参りに行きたがっていたが、結局行けずじまいだったらしい。もし行っていたならどうだったのであろう。無や喪失の象徴化を促そうとする臨床行為が高機能広汎性発達障害の者にどれほど有効なのか。考えさせられるところである。

（みずかみ・まさとし　臨床心理士）

文献１
「『少年Ａ』この子を生んで……」、「少年Ａ」の父母、文春文庫
文献２
「アスペルガー症候群の現在」、杉山登志郎、『そだちの科学　５』、日本評論社

ヨーロッパ美術紀行　（22）

清水由美子

シチリアの印象

今も残る日焼けのあとを目にする度にシチリアの旅を思い出す。5 月下旬に入って急に気温が 30℃ほどまでにあがっていて、太陽が燦々と降注ぐ中、水中翼船と列車とレンタカーを乗り継いで三角形の島とその北に連なるエオーリエ群島を巡った日々。多様すぎるイメージの数々や出会った人々の顔がまだ頭の中で混沌と渦巻いている。その中で永続する記憶として何が残るだろうかと考える。

例えば、旧市街の生活臭が味わいを醸す裏通りに点在する、サン・ドメニコ、サンタ・チタ、そしてサン・ロレンツォの３つの見事なバロック装飾に飾られた礼拝堂を回った清らかな朝のパレルモ。ジャコモ・セルポッタによる、愛くるしい天使の群が乱舞するスタッコ彫刻に頬が緩んだ。サン・ドメニコ礼拝堂にはヴァン・ダイクがパレルモで描いた《ロザリオのマドンナ》がある。修復を終え最近公開されたサン・ロレンツォ礼拝堂は、本来なら、「白い珊瑚の洞窟」さながらのロココばりの遊び心溢れた親密な装飾群と好対照を成したに違いない、カラヴァッジョの《降誕》があるべきところ。1969 年に盗難に遭ったまま行方がわかっておらず、ひっそりと写真が置かれていた。

もちろん、シラクーザのカラヴァッジョ作《聖女ルチアの埋葬》を忘れるわけにはいかない。所蔵先のベッローモ宮美術館が修復のため閉館中と聞かされていたので、ついに現物を間近に見ることのできた時の嬉しさはひとしおだった。サンタ･ルチア聖堂に里帰りしていたのである。逃亡生活の最中に滞在したシチリアで残した数点の内のひとつで傑作だと思う。人物群がキャンバスの下半分に集中し、強い光が横たわる聖ルチアを浮かび上がらせる。急いで描かれたように見えるが、悲痛な雰囲気に胸を突かれる。旧市街のオルティージャ島をそぞろ歩いた心地よい夕暮れと共に思い出す。

イオニア海に突き出す高台にあるタオルミーナへ、はるか下のタオルミーナ･ジャルディーニ駅でタクシーを拾い急勾配のジグザグの道を青く輝く海を眼下にぐんぐん上がりながらアプローチするのはなかなか劇的だった。２０世紀初頭にイギリス人の女性が町に寄贈したという、風変わりな鳥見小屋（ティーハウス）のある市民公園に咲き乱れるエキゾチックな花々の見事さ。旅行者とどこから現れたものやら子供の大群で溢れたウンベルト一世通りの人ごみを掻き分け、サン・ドメニコ・パレスに逃げ込めたときの安堵。１５世紀の僧院を改装した高級ホテルで「見学はできません」とサインがあるが、ホテルは公共の場所でもある。宿泊客の邪魔にならない限り利用客は丁重に扱われる。人気少ないバーでお茶をし、静謐で豊饒な花園が広がる庭を散策し、ドイツ皇帝ヴィルヘルムニ世や英国王エドワード七世、クルップ家やロスチャイルド家の富豪たち、D･H･ローレンスやオスカー･ワイルドなどの華やかな客人たちが訪れた頃のタオルミーナの甘美な魅力を想像してみたものだ。今のように観光客が大挙してやって来るようになったのはたかだかここ３０年ばかりのことらしい。タオルミーナからも見えた有名な活火山エトナ山を反対側から望みながら、海抜１０００メートル近い高台に向かってレンタカーを走らせるとシチリアのへそにあるエンナに辿り着く。最大の目的はここからほど近いピアッツァ・アルメリーナという町にあるローマ時代の「カザーレの別荘」である。３世紀末頃から４世紀始めにかけて建てられたもので、おそらくローマ皇帝マクシミアヌス帝の別荘と考えられているようだ。１２世紀まで使われたらしいが、火事、洪水、地滑りと災難が続き土砂に埋れていたのを１９世紀の終わりに部分的に発見され、今では世界遺産に組み込まれている。床全面に渡るモザイクを保護するためにアクリルの板ガラスで覆われた発掘作業現場に入り込むような格好である。「大狩猟の廊下」や「ヘラクレスの１２の偉業」を描いたモザイクの他、一般人に人気なのは「１０人の少女の間」で、ビキニに似た運動服姿でスポーツをする女性の姿態は確かに微笑を誘う。

多くのギリシャ遺跡も見た。今でこそバロック建築のシチリアが持ち上げられ修復作業も盛んに行われているが、かつてはシチリアと言えばギリシャ遺跡だった。本国ギリシャよりも立派な遺跡が数多く残るアグリジェントや、保存の良いセジェスタが名高いが、キラキラと輝く海に面して倒壊した神殿の柱などが累々と横たわる広大なセリヌンテの廃墟は何か胸に迫るものがある。カルタゴと友好関係にあったセリヌンテのギリシャ人は、セジェスタに入植したエミリ人に対抗するが、その後カルタゴと結んだセジェスタに破れ、町はカルタゴ人に破壊された。ペロポネソス戦争とかポエニ戦争が直接、間接に関係しているのだ。気の遠くなるようなそんな古代の残酷な出来事の跡がまざまざと目の前に広がることの衝撃。

旅することの悦びを満たしてくれた限りなく優しいイメージも多々ある。例えば島の西端のトラパニの近くの山の頂にあるエリーチェから望む夕焼けの赤い海に浮かぶエガディ諸島のたおやかなシルエット。エリーチェでの夜、黒々と光る石畳の街路の静けさ。神々しいほど美しい姿のストロンボリ島。・・・私の魂は体を抜け出してシチリア島を彷徨い出したようだ。

（しみず・ゆみこ　ブリュッセル在住）

＊ タイトル背景写真は「カザーレの別荘」より
＊ 下の写真は「セリヌンテの遺跡」

藤田博史・『マンスリー連続対談シリーズ』

カフェ・バー『CREMASTER（クレマスター）』2階

東京都新宿区歌舞伎町1-1-5 花園ゴールデン街

定員：10名　　入場料：2000円（1ドリンク付）

今後の予定は「精神分析医　藤田博史の公式サイト」
http://www.foujita.comに随時掲載いたします。
詳細はユーロクリニーク文化部　tel: 042-308-7637
E-mail: ys@euroclinique.com　までお気軽にお問い合わせください。

これまでお迎えしたゲストの方々

第１回　鈴木　晶（法政大学教授）　第２回　香山リカ（精神科医）　第３回　湯浅博雄（東京大学教授　第４回　斉藤　環（精神科医）
第５回　三瀦末雄（ギャラリー主宰）　第６回　飯島耕一（詩人）第７回　多和田葉子（作家）　第８回　川俣　正（美術家）
第９回　押井　守（映画監督）　第 10 回　岸田　秀（作家・和光大学名誉教授）　第 11 回　林　良文（画家）
第 12 回　松岡正剛（編集工学研究所所長）　第 13 回　高橋アキ（ピアニスト）

◇◇

INFORMATIONS

◇9月21日（木)、カフェ・バー『CREMASTER（クレマスター）』2階で開催された藤田博史・マンスリー連続対談シリーズ第13回は、ゲストに世界的なピアニスト高橋アキ氏をお迎えしました。テーマは「新しい耳の思考」、客席からの活発な質疑応答もあり、３時間近くにわたって充実した対論が交わされました。

◇ クレマスター企画、ユーロクリニーク文化部協賛により 2006 年 8 月 12 日〜9 月 6 日、カフェ・バー『CREMASTER（クレマスター）』にて展観された「西原つぐみ展〜吠えよ物語、額の檻の中」は好評のうちに終了いたしました。
作品の一部をクレマスターに展示しておりますので、営業時間(pm7:00~12:00)においでになればご覧になれます。
作品購入ご希望の方はクレマスターもしくはユーロクリニーク文化部までお気軽にお問い合せください。
また展覧会にあわせて製作された西原つぐみ個展ポスター（カラーA1 サイズ　500 円）もクレマスターにて好評発売中です。

◇ *Séminaire Privé*　通称「フジタゼミ」　毎週木曜日１９時より開催、参加費用＝会場代＋飲物代
会場はカフェ・バー『CREMASTER（クレマスター）』2階　東京都新宿区歌舞伎町1-1-5 花園ゴールデン街 tel：03-3203-3620

◇『セミネール通信』フリーペーパー版は、日仏会館（東京・恵比寿)、ストライプハウスギャラリー（東京・六本木)、東京ランダムウォーク六本木店（東京・六本木)、ギャラリー・ノンク・プラッツ（東京・府中)、クレマスター（東京・新宿)、ユーロクリニーク（埼玉・所沢）等に置かれています。ユーロクリニーク文化部ではフリーペーパー版の郵送及びメールマガジン版の配信を受付けております。
詳細はユーロクリニーク文化部(tel:042-308-7637)までお問い合せください。

◇ 精神分析医　藤田博史の公式サイト　http://www.foujita.com
◇ ユーロクリニーク公式サイト　http://euroclinique.com
◇ ユーロクリニーク文化部ブログ　http://eurodc.exblog.jp
◇ クレマスター公式サイト　http://cremaster.vis.ne.jp

SÉMINAIRE OUVERT PERMANENT

octobre　2006　No.26-45

『セミネール通信』　フリーペーパー版　2006 年 10 月号

発行　EUROCLINIQUE　編集　ユーロクリニーク文化部　榊山裕子

tel: 042-308-7637　E-mail: ys@euroclinique.com

メールマガジン版もあります。E-mail: seminaire@mac.com までお申し込み下さい。